



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	子育て期の女性のアイデンティティの確立に関する日韓比較：妻役割，母親役割，職業を中心にみた様相
Author(s)	金, 娟鏡; 福富, 護
Citation	東京学芸大学紀要. 第1部門, 教育科学, 56: 103-111
Issue Date	2005-03-00
URL	http://hdl.handle.net/2309/2072
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

子育て期の女性のアイデンティティの確立に関する日韓比較 — 妻役割, 母親役割, 職業を中心にみた様相* —

金 娟鏡**・福富 護***

学校心理学

(2004年10月29日受理)

1. 問題と目的

近年の日本における女性の教育水準の向上, 就業率の増加は, 「結婚し, 子どもを産む」といった家事・子育て「専業」の偏重から, 「子どもを育てながら, 仕事をする」といった仕事と家事・子育て「兼業」を含めた様々な選択肢を可能にし, 子どもをもつ女性の生き方に多様化をもたらした。しかしながら, 幅広い選択肢から一つを選び取ることは, それ以外の選択肢を放棄することでもある。たとえ, 意図的な自己選択であっても, 他の何らかの可能性を諦めたことで今の自分があるのだ, との悔恨を抱くことも生じ得る。とくに今日では, 従来とは逆に, 仕事と家事・子育て「兼業」を行っている女性が賞賛的になっている(江原, 2000a)。家事・子育て「専業」の女性は, 家事や子育てと仕事を両立させている女性と比較し, 社会から取り残された焦燥を感じることも多く, 妻役割, 母親役割だけでは自分らしさ, アイデンティティを確立できにくくなっている(岡崎・柏木, 1994)。しかし他方, 仕事と家事・子育て「兼業」に対する社会的評価が変わったからといって, 仕事と家事・子育ての両立が容易になったわけではない。仕事と家事・子育てとを両立させようとする女性は, 家事・子育てに専念する女性にはない, 仕事と家事・子育てのダブル・バインドを乗り越えることができなければ, 妻役割, 母親役割, 職業を統合したアイデンティティの確立が困難となる(江原, 2000b)。

かつては, 成人女性のアイデンティティの危機は, 中年期における「空の巣症候群」と呼ばれる母親役割

の喪失に起因するものとみなされていた。しかし, 女性の生き方の多様化が増してきた今日では, 子育て期の女性における妻役割, 母親役割, もしくは職業人といった複数の役割も, アイデンティティの確立感を低下させる要因となり得るのではないかと考えられる。そこで本研究は, 子育て期の女性を対象とし, 妻役割, 母親役割, 職業がアイデンティティの確立感にどのような影響を及ぼしているかについて実証的に検討することとした。

ところで, 妻役割, 母親役割, 職業に関連する要因を明らかにした先行研究では, 性役割観(鈴木, 1987; 大野, 1998; Barnett & Hyde, 2001など), 夫とのきずな(牧野, 1985; 末盛, 1999など)から影響を受けることが確認されている。伝統主義的性役割観は, 職業をもつと弱まるが, 妻役割, 母親役割の受容感を高めること, そして夫とのきずなの強さといった良好な夫婦関係は, 妻役割, 母親役割の満足感を高めることが明らかにされている。しかし, 性役割観, 夫とのきずながアイデンティティの確立感にどのように影響を及ぼすかについては検討されていない。性役割観, 夫とのきずなは, 妻役割, 母親役割を規定し, それらを媒介することで間接的にアイデンティティの確立感に影響を及ぼすのか, それとも直接的に影響を及ぼすのかは不明である。こうしたことから, アイデンティティの確立感に及ぼす要因を総合的に捉えるためには, 妻役割, 母親役割, 性役割観, 夫とのきずな, 職業といった各要因間の因果関係を検討することが不可欠であると考えられる。さらに, 高学歴女性におけるアイデンティティの確立の困難さが報告されている(山田, 2000)。そこで, アイデンティティの確立感に学歴が

* A comparative study on identity between child-rearing women in Japan and in Korea/KIM Yeonkyeong, Mamoru FUKUTOMI

** 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

*** 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

いかなる影響を及ぼすかも併せて検討する。

さて、性役割観とは「男女にふさわしいとみなされる行動に関する社会的期待・規範およびそれらに基づく態度」であると定義される(鈴木, 1991)。しかし、当該社会から求められる性役割の規範は固定されているわけではない(瀬地山, 1996)。そこには、社会状況および時代の変化を超えて受け継いでいく側面と、社会状況や時代の変化を反映して変容していく側面がある。また、国内における文化継承・変容の側面だけではなく、国を超えての通文化的な側面や各文化がもつ差異的な側面もあるが、文化の普遍性、差異性を理解するためには比較文化的研究が必要となろう。ただし、文化や社会環境が大きく異なる国との比較では、文化的背景や社会環境の差違のみが強調されることになり、類似もしくは共通する側面を検討することが困難となることが予測される(金, 2003b)。このような観点からすると、日本と同様に儒教的な文化背景をもち(光田, 1999)、日本とほぼ同様に少子化社会であり(日本: 1.33, 韓国: 1.30, 文化日報(2002)より)、女性の大学進学率も著しく高い(日本: 48.7, 韓国 65.5, 韓国教育人的資源部(2000)より)といった社会状況が類似している韓国との比較が格好といえるであろう。また、性役割観のみならず、妻役割、母親役割、夫とのきずな、職業、学歴といった各要因とアイデンティティの確立感との関わり方も、文化によって異なる可能性が考えられる。そこで本研究では、子育て期の女性のアイデンティティの確立感に影響する文化的異同を検討するために、日本と韓国を比較することとした。

2. 方法

2.1 調査対象

日本では東京都内の幼稚園・保育園に子どもを預けている女性900名に調査票を配布し、622名(回収率69.1%)から、韓国では釜山市内の幼稚園・オリニジップ^{注1)}に子どもを通園させている女性805名に配布し、345名(回収率42.9%)から協力を得ることができた。そのうち、欠損値が多かったものを除いて、日本では589名の回答(有効回答率65.4%)を、韓国では300名(有効回答率37.3%)の回答を分析対象とした。

2.2 手続き

調査票への回答は、各園に在園する3～5歳児の母親に依頼して、自宅で記入してもらい、配布から2週間後に回収した。なお、現在夫をもたない、もしくは

別居している場合は背景要因が異なるので、対象者は現在夫と同居している未就学児をもつ女性に限定した。調査は、日韓とも2000年8月から10月にかけて実施された。

2.3 調査内容

調査票は日本語版を先に作成し、韓国語版は日本語版の質問紙を調査者(筆者)が翻訳した後、バイリンガルの韓国人に日本語に翻訳してもらうという作業を通して、翻訳の適切さを確認した。調査票は次の質問項目から構成されている。

1) **アイデンティティ確立感**: Dignan(1965)のアイデンティティ尺度を参考に、自己受容感、自己安定性の側面から、アイデンティティが確立されているかどうかの感覚を測定する26項目を作成した。

2) **母親役割意識**: MacPhee,D.,Benson,J.B.,& Bullock ,D. (1986)を参考にし、予備調査で得られた項目を加え、母親役割の受容、満足感の側面から母親役割意識を測定する15項目を作成した。

3) **妻役割意識**: 予備調査で得られた回答内容に基づいて、妻役割の受容感、満足感の側面から妻役割意識を測定する15項目を作成した。

4) **夫とのきずな**: 柏木(1998)の記述から、妻側からみた夫とのきずなの測定に関わる部分を抽出し、「夫の喜びは妻の喜びである」「言葉でいわなくても、夫には私の気持ちがわかる」「夫とは一緒に暮らしながら助け合う人生の同伴者である」の3項目からなる尺度を作成した。

5) **性役割観**: 鈴木(1987)の性役割観(SESRA)は結婚観、教育観、職業観、平等・自立意識の下位尺度を持つ40項目から構成されているが、他の尺度と併せるとなると項目数が多い。SESRAの短縮版(SESRA-S)が鈴木(1994)によって作成されているが、SESRA-Sには改姓に関する項目が含まれていることから、韓国文化には適切でないと判断した。また、SESRA-Sには結婚観、教育観、職業観の3つの側面だけが取り上げられている。しかし、平等・自立に対してどのような態度をもっているのかは、性役割観の根幹をなすもつとも重要な側面である(鈴木, 1987)。そこで本研究では、SESRAに含まれていた平等・自立意識の側面を加えて翻案し、日韓の比較が可能な21項目を作成した。

6) 回答者の属性：対象者の年齢、子どもの人数、子どもの年齢、学歴、職業、家族構成を聞いた。

なお、1) から5) までの回答の仕方は、すべて「1.まったくそう思わない」から「2.とてもそう思う」の5件法とした。

3. 結果

3.1 回答者の属性

日本/韓国の平均年齢は35.1歳 (SD=4.44)/33.3歳 (SD=3.47)であり、子ども数は1.9人(SD=0.71)/1.9人 (SD=0.51)であった。学歴に関しては、日本では中・高卒26.2%, 専門学校22.7%, 短大卒23.2%, 大学卒以上29.0%, 韓国では中・高卒41.3%, 専門大卒^{注2)}20.3%, 大学卒以上38.3%を占めていた。現在同居中の家族数は日本が4.3人(SD=1.00), 韓国が4.2人(SD=0.85)であった。

3.2 各尺度の因子構造の検討

1) アイデンティティの確立感：Dignan(1965)の尺度は、全般的なアイデンティティの確立の感覚を測る

尺度である。そのため、アイデンティティは1次元であるとみなし、主成分分析を行った。その結果、第1主成分への負荷量が.30以上であったのは20項目であった (Table 1)。なお、これらの項目の信頼性係数 (Cronbachの α 係数) は.88であり、信頼性の高いことが示された。

2) 妻役割意識および母親役割意識：妻役割意識および母親役割意識尺度に関して、主因子法 (プロマックス回転) による因子分析を行った。固有値1を基準とした場合、それぞれの尺度の初期解において、第I因子に高い固有値が示された (順に、第I因子に5.41, 3.81, 第II因子に0.97, 0.87)。そのため、これらの尺度が単一の因子によって説明可能であると判断した。その上で、因子負荷量が.30に満たないものを削除し、因子の1次元性を確認するために、主成分分析を試みた。結果は、Table 2, 3に示されている。最終的には、それぞれ負荷量の大きい順に10項目ずつを採用した。信頼性係数 (Cronbachの α 係数) は妻役割意識尺度が.89, 母親役割意識尺度が.78と十分に高かった。

Table 1 アイデンティティの確立感

項	目	負荷量
18.	どこか自分はだめだという気持ちがある*	.740
17.	自分がバラバラでまとまりがないように感じる*	.725
12.	自分がなかなかだと思ったり、全くだめだと思ったり自分自身が一定していない*	.677
10.	どれが人の考えで、どれが自分の考えかわからなくなることがある*	.658
16.	人の言うことに左右されやすい*	.656
23.	私の問題は、本当は自分がどのようになりたいのかわからないことだ*	.626
21.	ある人に合わせようとしていたり、また全然別の人に合わせようとしていたりして一定していない*	.615
9.	ささいなことでも自分は激しく揺れ動かされるほうだ*	.611
20.	人がいるとすぐにその人に影響されるように思う*	.611
13.	少々のことであっても私は変わらず落ちついていられる	.566
22.	自分のしたいことがはっきりしている	.551
3.	自分はこんな人間だと言えるようなものがない*	.549
14.	私は自分の道をつかんでいると思う	.541
1.	私は完全な人間ではないが、自分が好きだ	.527
8.	今の自分は本当の自分ではないような気がする*	.517
25.	自分と人の境界があいまいになってしまうことがある*	.513
7.	今の自分に満足している	.489
2.	私には欠点もあるが、今のままでいいと思う	.454
11.	ずっと役割を演じてきてうんざりだ、自分自身になりたいと思う*	.404
19.	自分が思う自分と他者が見る自分とはとても一致していると思う	.324

項目No.は原質問紙のもの、*は逆転項目

説明率は33.25%

Table 2 妻役割意識

項 目	負荷量
2. 夫のために心から尽くせる	.814
7. 妻として夫に大切な存在だと思う	.780
1. 夫とともに家庭を支えているという自信と誇りがもてる	.751
15. 妻である自分を楽しんでいる	.677
6. 自分は妻業に向いてないと思う*	-.670
8. 妻がいるからこそ、夫が安心して仕事に専念できる	.664
5. 妻である私は一番大きい意味をもつ	.659
10. 夫とは相性がいい	.645
11. 夫の仕事に対する一番の理解者である	.624
3. 自分はあまり良い妻ではないと思う*	-.593
13. 夫のために、若さを維持しようと努力している	.524

項目No.は原質問紙のもの、*は逆転項目
説明率は46.17%

Table 3 母親役割意識

項 目	負荷量
2. 子どもの成長に最も喜びを感じている	.677
9. 子どものためならどんなことにも耐えられる自信がある	.640
8. 私は子育てに向いてないと思う*	-.628
11. 子どもと楽しく過ごしている	.573
4. 子どもが何を必要とするのかがよくわかる	.572
10. 母親は子どもに絶対的な存在である	.559
14. 育児を通して精神的な成長を感じている	.548
5. 子どもの養育やしつけのための自分なりの考えをしっかりとっている	.545
3. 母親になったことを後悔したことがある*	-.440
15. 私自身、現在は母親としての自分しか考えられない	.345

項目No.は原質問紙のもの、*は逆転項目
説明率は31.42%

3) 性役割観：性役割観に関する21項目について主因子法（プロマックス回転）による因子分析を行い、固有値1.00以上を基準としたところ5因子が抽出された。固有値は順に5.74, 2.17, 1.30, 1.11, 1.02であった。しかし、固有値の落差が比較的大きく、内容的にも解釈が可能な2因子が妥当であると判断した。そこで、因子負荷量が.30に満たない6項目を削除し、残りの15項目を用いて因子数を2に指定し、再び分析を行った（Table 4）。第I因子は、「男性と対等になるため、女性が自立の意識をもって地位向上をめざすべきである」「女性も、仕事を通して自己実現や人間としての成長をめざすべきである」「男女の関係は対等であるべきである」などの8項目が高い負荷を示している。これらの項目は、仕事や社会に対して男女が平等かつ対等であることを示しており、『仕事・社会に対する平等意識』と解釈した。第II因子は、「主婦が仕事をもつと家庭の負担が重くなるのでよくない」「専業主婦として趣味・スポーツ・レジャーなどを楽

しむ生活のほうが、共働きより幸せである」などの7項目の負荷が高い。これらの項目は、仕事より家事や子育てを重視し、家庭のことを優先とすることを示している。『家事・子育てで優先意識』と解釈した。信頼性係数（Cronbachの α 係数）は、第I因子が.82、第II因子が.76と高い値が得られた。

なお、本研究で抽出されたそれぞれの因子には、鈴木（1987）が提示した結婚、教育、職業、平等・自立の4つの側面が下位領域としてまとまらず、分散して構成されていた。また、本研究の『仕事・社会に対する平等意識』と『家事・子育てで優先意識』は、それぞれ鈴木（1994）の『平等主義的性役割観』と『伝統主義的性役割観』に相当するものと考えられる。

Table 4 性役割観

項目	因子 I	因子 II
8. 男性と対等になるために、女性が自立の意識を持って地位向上をめざすべきである	.871	-.181
9. 女性も、仕事を通して自己実現や人間としての成長をめざすべきである	.811	-.082
17. 従来男性の仕事と考えられてきた職業に今後は女性もどんどん進出すべきである	.684	-.036
16. 女性が社会に出て働けば、社会の発展にとってプラスになることが多い	.651	.037
7. 男女の関係は対等であるべきだ	.606	.020
5. 女性の人生にとって妻であり、母親であることも大事だが、仕事をするのもそれと同じくらい重要である	.546	.151
21. 女性は結婚して子どもが生まれても仕事を続けたほうがよい	.490	.177
19. 働く女性は夫のよきパートナーとして夫婦関係の理解を深めることができる	.436	.026
11. 主婦が仕事をもつと家庭の負担が重くなるのでよくない*	.072	.638
18. 専業主婦として趣味・スポーツ・レジャーなどを楽しむ生活のほうが、共働きより幸せである*	-.115	.602
10. 女性は家事や育児をしなければならないからフルタイムで働くよりパートタイムで働いたほうがよい*	-.223	.589
3. 主婦が働くくと夫をないがしろにしがちで、夫婦関係にひびが入りやすい*	.016	.553
14. 経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい*	.171	.508
2. 女性が社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚するのが難しくなるから、そういう仕事をもたないほうがよい*	.151	.471
13. 娘は専業主婦に、息子は職業人になることを想定して育てるべきである*	.170	.461
因子間相関行列		
因子 I	1.000	
因子 II	-.438	1.000

項目No.は原質問紙のもの、*は逆転項目、数値は当該因子への負荷量説明率は39.43%

3.3 各要因間の相関係数および日韓の平均値

本研究で用いた各要因の相関係数および各尺度の平均値注3)をTable 5に示す。Table 5の相関行列をみると、日韓ともに、各要因間の相互相関は比較的弱いですが、『妻役割意識』と『母親役割意識』の間にやや強い正

の相関が、『夫とのきずな』と『妻役割意識』の間には強い正の相関がみとめられた。他方、同じく日韓ともに、『社会・仕事に対する平等意識』と『家事・子育て優先意識』の間にやや強い負の相関がみられた。

Table 5 各変数の平均値および各変数間の相関係数

	平均値(SD)		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
	日本	韓国									
①職業	—	—		.224**	.161**	-.266**	.251**	-.166**	-.085	-.030	.123*
②学歴	—	—	.035		.257**	-.051	-.014	-.122*	-.127*	-.134*	.119*
③年齢	35.1(4.44)	33.3(3.47)	-.002	.202**	.052	.040	-.062	-.083	-.048		.124*
④家事・子育て優先意識	2.6(0.41)	2.7(0.34)	-.258**	-.140**	-.005		-.382**	.133*	.078	.070	-.273**
⑤仕事・社会に対する平等意識	3.6(0.61)	4.1(0.55)	.310**	.126**	.124**	-.471**		.000	-.069	-.001	-.061
⑥夫とのきずな	3.4(0.78)	4.1(0.60)	.007	.075	-.107**	.064	.022		.673**	-.317**	.194**
⑦妻役割意識	3.3(0.78)	3.7(0.60)	-.090*	.039		-.073	.104**	-.044	.740**	.434**	.274**
⑧母親役割意識	3.7(0.55)	4.0(0.43)	.044	-.010	-.024	-.127**	-.018	-.298**	.403**	.082	
⑨アイデンティティの確立感	3.5(0.61)	3.6(0.57)	.131**	-.102*	.052	-.209**	.090*	.274**	.327**	.271**	

表の右上部は韓国、左下部は日本、**は1%水準で、*は5%水準で有意である
 職業に関しては、専業主婦を1、パートを2、フルタイムを3に置き換えた
 学歴に関しては、高卒を1、専門・短大卒(韓国では専門大卒)を2、大学卒以上を3に置き換えた

3.4 パスモデルの作成

子育て期の女性のアイデンティティの確立感に、妻役割意識、母親役割意識、性役割観、夫とのきずな、職業、学歴がどのような過程を経て影響を及ぼすのか、その因果関係を検討するために、パス解析を行った。基準変数は『アイデンティティ』の確立感とし、説明変数は『妻役割意識』『母親役割意識』、性役割観の『社会・仕事に対する平等意識』『家事・子育て優先意識』とし、また『職業』『学歴』の属性変数を最後に投入した。

パス係数の算出には変数増加法を用いた。次に、投入された変数の偏回帰係数が有意なパスによって図を作成した (Figure 1, Figure 2)。モデル全体の重決定係数は日本が $R^2=.22$ 、韓国が $R^2=.23$ であった。

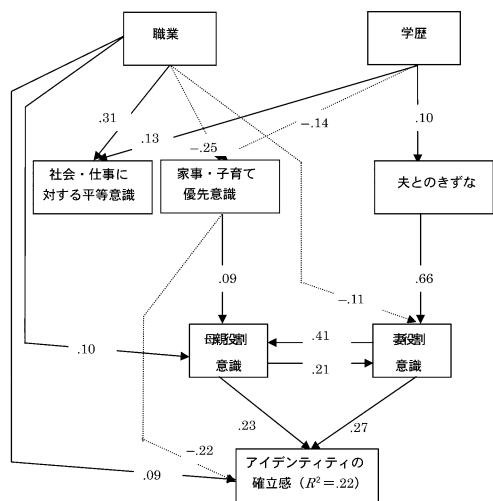


Figure 1 パスダイアグラム (日本)

実線は正のパス、点線は負のパス、数値は標準偏回帰係数を示す

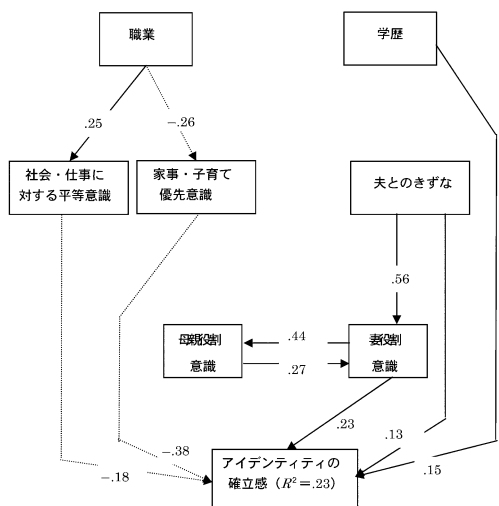


Figure 2 パスダイアグラム (韓国)

実線は正のパス、点線は負のパス、数値は標準偏回帰係数を示す

1) 日本

『アイデンティティ』の確立感に正の直接的影響を及ぼしていたのは、『妻役割意識』(.27) 注4)と『母親役割意識』(.23)であった。またその影響力はきわめて弱いながらも、『職業』(.09)からも正の直接的影響がみられた。しかし、『家事・子育て優先意識』(-.24)からは弱い負の直接的影響がみとめられた。一方、『アイデンティティ』の確立感に間接的影響注5)を及ぼしていたのは、『職業』(.05), 『学歴』(.06), 『家事・子育て優先意識』(.03), 『夫とのきずな』(.02)であり、きわめて弱い正の間接的影響が示された。

2) 韓国

『アイデンティティ』の確立感に正の直接的影響を及ぼしていたのは、『妻役割意識』(.23), 『夫とのきずな』(.13) 『学歴』(.15)であった。しかし、『家事・子育て優先意識』(-.38), 『社会・仕事に対する平等意識』(-.18)からは、負の直接的影響がみられた。他方、『アイデンティティ』確立感に間接的影響を及ぼしていたのは、『職業』(.01), 『夫とのきずな』(.14), 『母親役割意識』(.06)であり、きわめて弱い正の間接的影響がみとめられた。

4. 考察

各尺度については、結果のところでも論及してきたので、ここではとくにパス解析の結果を中心として、日韓それぞれについて考察した後、両国を比較し総合的に考察する。最後に、今後の課題について論じる。

4.1 子育て期の女性のアイデンティティの確立を規定する要因

1) 日本

日本において、妻役割、母親役割、性役割観、夫とのきずな、職業、学歴のそれぞれが、アイデンティティの確立感にどのような影響をもたらしているかを図式化したのがFigure 1である。本研究では、『妻役割意識』『母親役割意識』が強いほど、『アイデンティティ』の確立感が強まることが明らかになった。また、影響力はきわめて弱いけれども、『職業』をもつことは、『アイデンティティ』の確立に肯定的な影響を及ぼしている。つまり、日本の子育て期の女性にとって、妻として、母親として、職業人としてのそれぞれの役割を意識化することは、アイデンティティを支える原動力になっていることを示唆する。さらに、『妻役割意識』は『夫とのきずな』によって強められており、

『妻役割意識』と『母親役割意識』とは相互促進的に影響し合っている。先行研究において、夫との良好な関係は、妻役割に(末盛, 1999)だけでなく、母親役割に(牧野, 1985)も肯定的な影響を及ぼすことが指摘されているが、本研究によって、妻役割を媒介にして母親役割へと影響する道筋が見出された。また、『家事・子育て優先意識』が強いほど、『アイデンティティ』の確立感が弱まっており、家事・子育てを優先する伝統主義的性役割観は、アイデンティティの確立感を低下させる結果が得られた。

次いで、『職業』をもつことは、『妻役割意識』を弱めている。さらに、『職業』をもつことは、『家事・子育て優先意識』の減少をもたらし、これによって『母親役割意識』は間接的に弱められ、『アイデンティティ』の確立感が弱まることが確認された。職業が妻役割に否定的な影響を及ぼしたことは、有職主婦の場合、専業主婦のように家事・子育てをこなす時間的余裕が十分ではないが、かといって幼い子どもの世話で手を抜くことはできない状況の中で、結果的に夫の世話をする妻役割を減ずるという選択(岡崎・柏木, 1994)をするからではないかと考えられる。そして『職業』をもつことは、『家事・子育て優先意識』に否定的な影響を及ぼし、これが『妻役割意識』『母親役割意識』を媒介し、結果としてアイデンティティの確立感を低下させている。他方で『職業』をもつことは、わずかな影響力でありながら『母親役割意識』を強め、相互促進的な関係をもつ『妻役割意識』を介して『アイデンティティ』の確立感を強めている道筋もみられる。このことを併せて考えると、日本では妻役割、母親役割、職業人の複数の役割を調整し統合していく上で、家事・子育てを優先する意識からくるジレンマが、有職主婦のアイデンティティ確立感の低下の要点となると解釈することができよう。そして本研究の結果は、江原(2000b)が指摘した仕事と家事・子育てのダブル・バインドを抱えている日本の有職主婦の心情を実証的に裏付けるものであるといえよう。

一方、『職業』をもたないと、『家事・子育て優先意識』が強まり、それを介して『アイデンティティ』の確立感が弱まっている。日本の専業主婦の場合、家事・子育て優先を志向することで母親役割意識は高められるけれども、家事・子育てに縛られてしまい、結果的に自分らしさを発揮できないとのジレンマを感じていることがうかがえる。岡崎・柏木(1994)が指摘した「社会から取り残された焦燥を感じ、妻役割、母親役割だけでは自分らしさ、アイデンティティを確証できにくくなっている」ことの背後には、家事や育児

を優先する伝統主義的性役割観が弱まったことが影響を及ぼしているといえよう。

また、『学歴』が高学歴であることは、『夫とのきずな』を強める結果をもたらしている。さらに、『学歴』が高いことは、『夫とのきずな』『妻役割意識』を介して『アイデンティティ』の確立感を強めている。学歴が高いほど夫とのきずなが強いと感じている点は、高学歴女性は夫から理解・支持されていると認知する傾向があるとの先行研究(柏木・平山, 2003)と一致するものであるが、本研究によってはじめて、高学歴が夫との関係を通してアイデンティティの確立に寄与することが見出された。しかしながら同時に、『学歴』が高いことは、『家事・子育て優先意識』を弱め、これがさらに『妻役割意識』『母親役割意識』の減少を介して、『アイデンティティ』の確立感を弱めている。このことは、山田(2000)が指摘した高学歴女性におけるアイデンティティの確立の困難さが、家事や子育てを優先する伝統主義的性役割観からくるジレンマによって起因することを示すものである。

2) 韓国

Figure 2に示されているように、韓国において、『妻役割意識』は『アイデンティティ』の確立感を強めていることが確認された。また、『妻役割意識』は『母親役割意識』と相互促進的に影響し合っており、『妻役割意識』は『夫とのきずな』によって強められていた。さらに『夫とのきずな』が強まるほど、『アイデンティティ』の確立感が強まっていることが明らかになった。既述したように、日本においても夫とのきずなは、妻役割を介してアイデンティティの確立感を支えているが、夫とのきずながアイデンティティの確立感に直接的に影響を示すのは、韓国においてのみである。このような結果は、韓国の子育て期の女性にとっては、夫との良好な関係が、アイデンティティの確立にとってきわめて重要な意味をもつことを示唆する。その背後には、瀬地山(1996)が指摘した家族との情緒的きずなが重視される韓国文化の影響があると推測される。また、『学歴』の高さは『アイデンティティ』の確立感を強めることが示されている。この結果は、先行研究(キム, 1993)と一致するものであり、とくに学歴を重視する韓国社会の現状を反映しているものと考えられる。

次いで、『社会・仕事に対する平等意識』が強まると、『アイデンティティ』の確立感が弱まる結果となっている。さらに、『職業』をもつことが『社会・仕事に対する平等意識』を強めることを媒介にして、ア

アイデンティティの確立感の低下を生じている。では、なぜこのような結果が示されたのであろうか。その理由として、長い間家父長制の社会の中で、社会的にまた仕事の面で女性が不平等に扱われることを宿命のように受け容れていながらも、既婚女性の社会進出が当然の時代となった社会状況（韓国女性開発院，1998）があげられよう。韓国では古くから「女性があまりにももの知りだと、人生の運命はよくない」といい、知的な女性に対する偏見が根強く存在してきた。知的能力を発揮しないことを強いられ、これを内面化して、男性と同様の社会活動を避けることを、ハン(1999)は「知的コンプレックス」と呼んでいる。そして、『職業』をもつ人ほど、『社会・仕事に対する平等意識』は高まるが、『アイデンティティ』の確立感が弱まるといった本研究の結果は、韓国の女性の「知的コンプレックス」を反映している結果と解釈できよう。

他方、『家事・子育て優先意識』が強まると、『アイデンティティ』の確立感は弱まっている。これを上記の『社会・仕事に対する平等意識』と併せて考えると、今日の韓国の子育て期の女性は、平等主義的性役割観、伝統主義的性役割観のどちらの方向からも、自分らしさを支えることができないことがうかがえる。韓国の有職主婦の場合には、伝統的な性役割観から脱却しているがゆえに、社会や仕事に対する平等主義的性役割観をもつことによってアイデンティティの確立に困難を感じる。これに対して、韓国の専業主婦の場合には、職業によって自分らしさを発揮したいと感じながらも、家事や子育てを優先しようとするジレンマによってアイデンティティの確立に困難を感じているのではないかと解釈できよう。

3) 日本と韓国の比較

日韓ともに、『アイデンティティ』の確立感には、『妻役割意識』が肯定的影響を及ぼしている。さらに、『妻役割意識』は『夫とのきずな』によって強められ、また『母親役割意識』とは相互促進的に影響している。このことから、日韓の子育て期の女性のアイデンティティの確立において、妻として夫と良好な関係を築くことが、きわめて重要であることが示唆される。しかし、『家事・子育て優先意識』は、日韓の子育て期の女性の『アイデンティティ』の確立感を低下させている。日韓ともに既婚女性が社会に進出する比率はかつてに比べると着実に増えていることから、とくに日韓の専業主婦は、家事・子育てだけに専念する女性を「つまらない女性」「遅れている女性」とみなし（江原，2000b）、負い目を感じているのではないかと考えられ

る。このことは、両国ともに専業主婦において、家事や子育てを優先する意識が強いにもかかわらず、家事や子育てを優先する意識によってアイデンティティの確立感が低下することから裏付けられる。

一方、日本では、きわめて弱いながらも『職業』をもつことが『アイデンティティ』の確立感に肯定的な影響をもたらしており、また弱いながらも『職業』は『母親役割意識』を介して、『アイデンティティ』の確立感に寄与する道筋もみられた。ところが韓国では、『職業』は『社会・仕事に対する平等意識』を強め、『アイデンティティ』の確立感を低下させている。つまり、韓国の有職主婦の場合は、職業を通じた社会進出を恐れるかどうかといった、職業を通しての自己実現のありかたの問題を克服できることによって、アイデンティティが確立されるのではないかと解釈できよう。しかしながら日本においても、山本・本村（1986）の調査時点においては、既婚女性には社会進出への恐れがあり、達成動機が抑圧されてきた残滓が残っていることが指摘されている。本研究の結果は、その後日本ではこのような傾向がみられなくなったのに対して、韓国では未だ根強く残っていることを示唆するものと考えられる。

また、韓国では日本とは異なって、『母親役割意識』と『アイデンティティ』の確立感との間で有意なパスはみられなかった。そのひとつの理由として、韓国では『母親役割意識』と『アイデンティティ』の確立感との相関は、他の相関係数に比べると相対的に低いことから、母親役割が自分らしさの支えとは独立した、絶対的な価値に奉仕する規範（金，2003a）として意識されているのではないかと推察される。

4.2 まとめと今後の課題

本研究では、子育て期の女性のアイデンティティの確立に、妻役割、母親役割、職業、性役割観、夫とのきずな、学歴の諸要因が、どのように関与しながら総合的に影響を及ぼしているのかについて、日韓を比較した。これによって、日本では諸要因の調整がアイデンティティの確立に重要な働きをもち、韓国では夫とのきずなおよび職業によって規定される性役割観がアイデンティティの確立の中心を成していることなど、文化による異同が明らかにされた。

しかしながら、次のような今後の課題も残された。本研究で取り上げられた要因によるパス解析の説明率は、日韓ともに決して高いとはいえない。つまり、子育て期の女性のアイデンティティの確立には、他の要因も大いに影響を及ぼしていると考えられよう。たと

えば、妻であり、母親であり、職業をもつ自分だけではなく、地域活動などの様々な社会的役割を通して、自分らしさが確立されていくこともアイデンティティの確立に寄与する(ヨム, 1998) ことなども考えられる。今後は、子育て期の女性のアイデンティティの確立を規定する多様な要因について、さらに検討する必要があるだろう。

引用文献

- Barnett,R.C.,&Hyde,J.S. 2001 Women, Men, Work, and Family. *American Psychologist*, 56(10), 781-796
- 文化日報 2002 低出産時代：新人口政策に苦心(ソウル, 2002/9/23付)
- Dignan,M.H. 1965 Ego identity and Maternal Identification. *Journal of Personality & Social Psychology*, 1, 476-483
- 江原由美子 2000a ジェンダー秩序 勁草書房
- 江原由美子 2000b 母親たちのダブル・バインド 目黒依子・矢澤澄子(編). 少子化時代のジェンダーと母親意識. 新曜社, 29-46
- ハン ギュリヤン 1999 女性と結婚生活：韓国 片山隆裕(編). アジアの文化人類学. ナカニシヤ出版, 29-44
- 韓国教育人的資源部 2000 教育統計年報
- 韓国女性開発院 1998 女性統計年報
- 柏木恵子 1998 社会変動と家族発達 柏木恵子(編). 結婚・家族の心理学. ミネルヴァ書房, 5-50
- 柏木恵子・平山順子 2003 結婚の"現実"と夫婦関係満足度との関連性—妻はなぜ不満か. 心理学研究, 74(2), 122-130
- 金 娟鏡 2003a 「母親としての自分」に対する韓国人母親の意見分析. 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 316
- 金 娟鏡 2003b 日韓の母親における「子育て観」の因子分析的研究. 応用心理学研究, 29(1), 17-26
- キム ウンア 1993 既婚女性のアイデンティティと生活満足感との関係研究. 淑明女子大学大学院修士論文(未公開)
- 古谷野 亘 1988 多変量解析ガイド 川島書店
- MacPhee,D.,Benson,J.B.&Bullock,D. 1986 Influences on maternal self-perceptions. *Paper presented at the Fifth Biennial*

注)

- 1) 日本の保育園に当たるが、共働き家庭の子どもとともに専業主婦家庭の子どもも保育している
- 2) 日本の短大に該当する
- 3) 各尺度の平均値は、各尺度項目得点の合計値/項目数である
- 4) 括弧内の数値は β 係数である
- 5) 間接的影響とは、他の変数を通して伝えられる間接的な影響であり、パス係数の積による(古谷野, 1988)。例えば、日本の『アイデンティティ』の確立感に対する『夫とのきずな』の間接的効果は、a) 『夫とのきずな』→『妻役割意識』→『アイデンティティ』の確立感, b) 『夫とのきずな』→『妻役割意識』→『母親役割意識』→『アイデンティティ』の確立感, c) 『夫とのきずな』→『妻役割意識』→『母親役割意識』→『アイデンティティ』の確立感、の3つの経路でのそれぞれのパス係数の積を合計したものとなる

International Conference on Infant Studies, Los Angeles.

- 牧野カツ子 1985 乳幼児をもつ母親の生活と育児不安 家庭教育研究所紀要. 9, 1-13
- 光田明正 1999 「国際化」とは何か 玉川大学出版部
- 大野洋子 1999 家庭役割とジェンダー 東洋・柏木恵子(編). 社会と家族の心理学. ミネルヴァ書房, 81-112
- 岡崎奈美子・柏木恵子 1994 これからの女性の生き方についての発達の考察—既婚女性を中心に考える—. 発達研究, 10, 73-81
- 瀬地山 角 1996 東アジアの家父長制—ジェンダーの比較社会学 勁草書房
- 末盛 慶 1999 夫の家事遂行および情緒的サポートと妻の夫婦関係満足感—妻の性別役割意識による交互作業. 家族社会学研究, 11, 71-82
- 鈴木淳子 1987 フェミニズム・スケールの作成と信頼性・妥当性の検討. 社会心理学研究, 2(2), 45-54
- 鈴木淳子 1991 平等主義的性役割態度：SESRA(英語版)の信頼性と妥当性の検討および日米女性の比較. 社会心理学研究, 6(2), 80-87
- 鈴木淳子 1994 平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)の作成. 心理学研究, 65, 34-41
- 山田昌弘 2000 「よりよい子育て」に追い込まれる母親たち 目黒依子・矢澤澄子(編). 少子化時代のジェンダーと母親意識. 新曜社, 69-90
- 山本祥子・本村 汎 1986 高学歴女性の性役割規範に対する態度—中年期のアイデンティティ形成に向けて—. 大阪市立大学生活科学部紀要, 34, 419-434
- ヨム ヨンミ 1998 女性のアイデンティティ変化に関する研究—地域女性運動に参加している主婦を中心に—. ソガン大学大学院修士論文(未公開)

付記

調査にご協力くださいました日韓の母親にお礼申し上げます。